

# 癌とナツパ・青汁食

医学博士 遠藤 仁郎 述

## 癌をたとえれば

癌は、自分のからだの細胞が変質し、悪性(癌)化することにはじまる。

「たとえば、不良少年のようなものだ」と、大学の病理の講義で聞いたことがある。

つまり、癌とからだの関係は、ちょうど、バツコしようとする青年の不良化・過激化と、それを食いとめようとする治安当局の戦いに似ている。

### 悪性(癌)化

癌を誘発するもの、すなわち発癌(癌原)物質——化学物質・放射線・ビールスなど——や発癌促進物質があり、その刺戟によって、細胞に突然変異がおこり、悪性化のいとぐちができる。

それが進行して、しだいに癌化するわけだが、一旦癌化すると、その細胞はとめどなく増加をはじめ、ついに癌腫になる。

### 細胞の抵抗力

しかし、この際、細胞自体に、十分の防衛力があれば、それに抵抗し、そう簡単に悪性化することはない。

まいが、何らかの理由で抵抗力・防衛能力がよわくなって(下地ができて) いれば、変質(悪性化)されやすいだろう。

それは、志操堅固な青年であれば、たとえ誘惑があつても、よくこれをはねかえし、すぐさま不良化することもあるまいが、不平不満をもち、思想的に不安定であつたり、すでにグレかかつていけば、たちまち、過激化・暴力化してしまうようなものだ。

### 防衛組織

からだには、自分のもの(自己)と、そうでないもの(非自己)をみわけ、それを排除しようとする防衛(免疫)組織があり、免疫リンパ球が、その第一線の監視にあたっている。

そして、少しでも異常のある細胞ができれば、ただちにそれをキャッチし、その情報を防衛(免疫)組織につたえる。

全身の免疫組織は、この情報に応じて活発な防衛活動をはじめ、各種の免疫物質を動員して、異常細胞の排除・殲滅に全力をそそぎ発病を防ぐ、という仕組みになっている。

しかし、この監視リンパ球や免疫組織の能力に欠陥があつて、異常細胞の捕捉がおくれたり、制圧活動が不十分であれば、細胞の悪性化・癌化は無制限に進行することになる。

それは、不良分子の過激化・暴力化の監視にあたる治安要員、情報網や全国組織のそれに似ており、それらの能力がすぐれており、正確、活発であれば、不良分子はすみやかに摘発され、潰滅されるであろうが、もし、そこに、何らかの欠陥があれば、ついには、全国的にひろがり、手におえなくなってしまうことにな

